

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820055

研究課題名（和文）日本語教育における実践研究の理論と日本語教師の実践研究観に関する
考察

研究課題名（英文）Theory and Japanese teacher perceptions of *Jissen-Kenkyuu* in
Japanese Language Education

研究代表者

市嶋 典子 (ICHISHIMA NORIKO)

早稲田大学・日本語教育研究センター・研究員

研究者番号：90530585

研究成果の概要（和文）：

本研究では、日本語教師へのインタビューによる意識調査と文献調査により、日本語教育において実践研究がどのように行われてきたのかという実態を把握し、問題点を明らかにした。インタビュー分析の結果、教師達は、実践研究の研究方法が未だ明確にはされていないことを問題とし、実践研究を通して、自身の実践の改善のみならず、カリキュラムや組織の改革まで視野に入れるべきであると考えていることが明らかになった。先行研究からは、研究方法、教育観の不在が明らかになった。これらの問題点を包括的に捉え直し、日本語教育学的実践研究の新しい理論的枠組みの一試案を示した。

研究成果の概要（英文）：

This study investigates and analyzes the theory of *Jissen-kenkyuu* and Japanese teacher perception of research and practice. From the interview data analysis come the following points: Firstly, Japanese teachers felt some inner resistance to research method for *Jissen-Kenkyuu*, and they were not able to overcome their resistance. Secondly, Japanese teachers carried out process for reviewing the role of *Jissen-Kenkyuu*, and they found the meaning in being able to change their sense of values. Thirdly, they regard these changes as motivation with next Japanese lessons but it is also necessary to change the educational system.

This study also is based on the *Jissen-kenkyuu* theses which analyzed the qualitative change in the field of Japanese Language teaching. Many theses did not have research method and educational philosophy. In addition, this study shows the possibility to connect with theory and practice and new theoretical frame for *Jissen kenkyuu* in the field of Japanese Language Teaching.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
21年度	940,000	282,000	1,222,000
22年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,640,000	492,000	2,132,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：実践研究，質的研究，アクション・リサーチ，教育観，教師の協働，制度の改革，対話的アセスメント

1. 研究開始当初の背景

1990年代から2000年代にかけて、日本語教育における実践研究のパラダイム転換が盛んに議論されてきた。その中では、基礎研究の理論を実践現場で応用する研究としてではなく、人間活動の現実の事象の中から研究を出発させる必要性が主張された。さらに、実践と研究を一体化させ、実践から理論を生み出すことの重要性が指摘されるようになってきた。この流れに伴って、各地で様々な実践報告会が行われるようになった。ただし、その内容は、「教材と教育技術」等の日本語の教え方の「how to」が中心になる傾向があった。このように、日本語教育における実践研究に関する説明理論と実践報告を比較すると、これらの間には、乖離が見られた。また、日本語教育における実践研究について論じた先行研究の多くは、理念的、理論的な観点で主張されたものが多く、実践研究を行う主体としての日本語教師の認識そのものは、全く扱われていないという問題が浮かび上がってきた。そして、理念、理論先行で議論されてきた実践研究の問題だけでなく、現場の日本語教師の立場から見た実践研究の問題を明らかにし、両者の接点を見出した上で、新たな実践研究の理論的枠組みを構築する

必要があるのではなかという着想を得るに至った。また、近年のグローバル化により、学習者も多様化し、学習者のニーズや実践のあり方も複雑化してきた。このような、複雑で困難な日本語教育の分野に特有の背景を考慮した上で、日本語教育の現場に即した理論と実践を結ぶ視座を模索していく必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下のとおりである。

- (1) 日本語教師へのインタビューによる意識調査により、実践研究の問題点を明らかにする。
- (2) 実践研究の理論を現場の教師の問題意識から捉え直し、日本語教育における実践研究の理論的枠組みを構築する。
- (3) 具体的な実践による実践研究の理論的枠組みの検証、修正

本研究では、実践研究を試みたことがある日本語教師への半構造化インタビューから、彼らが、どのような現場で、いかなる実践を行ってきたのか。自ら実践し、研究することによりいかなる困難点、葛藤を感じているのか。また、研究を通していかなる学びが形成されているのか。これら全てがどのような関係を

持っているのかを有機的、立体的に描き出すことによって、日本語教育の実践研究の実態と問題点を明らかにした。さらに調査結果から導き出された実践研究の実態と、先行文献における実践研究の理論との接点を見出した上で、日本語教育学的実践研究としての理論を精緻化させた。さらに、これらを、実際に具体的な実践を基に検証することによって、現場に即した理論を提案した。

3. 研究の方法

日本語教育における実践研究について論じた先行研究の多くは、理念的、理論的な観点で主張されたトップダウン的なものであり、実践研究を行う主体としての日本語教師の認識そのものは、扱われることはなかった。そこで、本研究では、実践研究の問題を、先行研究のみならず、実践を行う主体である日本語教師自身から得たデータに基づいて知見を得る質的研究、その中でも方法論が整っている修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いて、日本語教師の実践研究に関する認識を明らかにし、実践研究の意義と問題点を明らかにした。

4. 研究成果

本研究では、実践研究を試みたことがある日本語教師20名に対して半構造化インタビューを行い、彼らが、どのような現場で、いかなる実践を行ってきたのか。自ら実践し、研究することによりいかなる困難点、葛藤を感じているのか。また、研究を通していかなる学びが形成されているのか。これら全てがどのような関係を持っているのかを有機的、立体的に描き出すことによって、日本語教育の実践研究の実態と問題点を明らかにした。

また、日本語教育の分野で実践研究について言及している論文の内容分析を行い、日本語教育において、実践研究がどのように位置

づけられているのかを明らかにした。

その上で、実践研究の理論を現場の教師の問題意識から捉え直し、日本語教育学的実践研究の新しい理論的枠組みの一試案を示した。

文献調査については、教育心理学の分野における授業研究の問題を論じた論考、アメリカ、ヨーロッパ、アジアの学校教育の分野におけるレッスンスタディ事例について論じた論考、社会学、心理学の分野において論じられているアクション・リサーチについての論考、学会誌『日本語教育』、お茶の水女子大学、大阪大学、早稲田大学の紀要や国立国語研究所発行の『日本語教育論集』に、現在までに掲載されている全ての実践研究論文を収集し、内容を分析し、これらを網羅的に体系化し、データベース化した。その上で、教育観、研究方法論の不在という問題点、教師の成長という視座だけではなく、カリキュラムや制度改革、組織間の連携という視座の重要性を明らかにした。

インタビューで得られた結果については、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の手法を用いて分析し、日本語教育学的実践研究の理論に関する仮説生成を行った。さらに、研究・調査の結果を基に、日本語教育学的実践研究の概念の更なる考察、検討を行い、モデル構築の為の原案を作成した。また、プロトタイプの検証を通じて、課題を明らかにし、仮説モデルの修正版を作成し、「対話的アセスメント」という実践研究に関連する新たな概念を提示した。このような調査を重ねることにより、アンケート調査や量的研究では捨象されてしまう教師の実践研究に関する認識が生成されたプロセスを描き出すことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 広瀬和佳子, 尾関史, 鄭京姫, 市嶋典子 (2010). 実践研究をどう記述するか — 私たちの見たいものと方法の関係『早稲田大学日本語教育学』7, 43-68. <http://hdl.handle.net/2065/29804>
早稲田大学日本語教育研究科 (査読無し)
- ② 市嶋典子 (2009). プロセス的評価, 主体的評価はどのような授業設計で可能か — 学習者と教師が共に評価について考える意味をめぐって『WEB 版リテラシーズ』6(2), 11-20. (<http://literacies.9640.jp/web01.html#web12>) くろしお出版 (査読有り)
- ③ 市嶋典子 (2009). 相互自己評価活動に対する学習者の認識と学びのプロセス『日本語教育』142, 134-144. 日本語教育学会 (査読有り)
- ④ 市嶋典子, 舘岡洋子, 初見絵里花, 広瀬和佳子, 古屋憲章 (2009). ハイブリッドな学習コミュニティにおける教育観・学習観の変容 — クリティカル・ラーニングの実践を通して『WEB 版 日本語教育実践研究フォーラム報告』 (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/nkg/kenkyu/Forumhoukoku/kk-Forumhoukoku.htm>). 日本語教育学会 (査読無し)

[学会発表] (計 5 件)

- ① 市嶋典子 (2010 年 8 月 29 日). 「教師と学習者による対話的アセスメントの意義と課題」舘岡洋子, 市嶋典子, 広瀬和佳子, 古屋憲章『自主シンポジウム: なぜ協働するのか』日本教育心理学会第 52 回総会 (早稲田大学).
- ② 市嶋典子 (2010 年 7 月 31 日). 「日本語

教育における対話的アセスメントの意義と可能性」ICJLE 2010 年世界日本語教育大会 (台湾政治大学).

- ③ 市嶋典子 (2010 年 5 月 23 日). 「日本語教育学において実践研究はいかに意味づけられてきたか」日本語教育学会春季大会 (早稲田大学).
- ④ 武一美, 古屋憲章, 坂田麗子, 市嶋典子, 尾関史, 田中里奈 (2010 年 3 月 20 日). 「自律的日本語学習の実現に向けて — 学びをつなぐポートフォリオとは何か—」早稲田大学日本語教育学会 (早稲田大学).
- ⑤ 市嶋典子 (2010 年 3 月 12 日). 「日本語教育における評価とは何か」国際言語教育セミナー (日本・韓国・北東アジア研究センターCJKNEAS: ジャワハルラール・ネルー大学).

[図書] (計 1 件)

- ① 市嶋典子 (2010). 対話的アセスメントの実践研究 — 価値の衝突と共有のプロセスの創出. 佐藤慎司, 熊谷由里 (編)『アセスメントと日本語教育 — アセスメントの多様化とその実践へ向けて』(pp. 125-152) くろしお出版.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

市嶋 典子 (ICHISHIMA NORIKO)
早稲田大学・日本語教育研究センター・研究員
研究者番号: 90530585